

第Ⅰ部第2章「中央ユーラシアと東アジア世界」の取り扱いについて

石井 栄二

20

22年度の「歴史総合」の実施に続き、23年度からは「世界史探究」が始まる。この新しい科目の教科書『詳説世界史』（世探704）には、現行の教育課程における『詳説世界史 改訂版』（世B310）と比較すると数多くの変更点がある。内容構成はもちろん、近年の歴史学の研究動向を反映した新しい視点の導入や歴史用語を精選した叙述、学習者みずからが比較し、読み解くことをうながす資料や図版の提示など、新課程に対応する様々な工夫がほどこされている。

本稿では、例として第2章「中央ユーラシアと東アジア世界」を取り上げ、導入された著作者の新しい視点を中心に紹介したいと思う。高校の現場において授業展開を計画する際の一助となれば幸いである。

ここに取り上げた『詳説世界史』第2章「中央ユーラシアと東アジア世界」（p.37～53）は、旧学習指導要領「世界史B」では「(2)諸地域世界の形成」の「ウ 東アジア世界・内陸アジア世界」にあたる。要領では遊牧世界への言及と並立させながらも、内容の中心は「中華文明に依拠する東アジア世界の骨格が形成されたこと」にあった。

これに対して、改訂を受けた今回の学習指導要領、および解説では「(3)諸地域の歴史的特質」において、「秦・漢と遊牧国家、唐と近隣諸国の動向などを基に、東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質を理解」し、「東アジアと中央ユーラシアの歴史に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互の関わりなどに着目し、主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたり

して読み解くことが求められている。

『詳説世界史』第2章の構成

本章では「中央ユーラシアと東アジア世界」という章題のとおり、第1節「中央ユーラシア——草原とオアシスの世界」から始まり、第2節「秦・漢帝国」、第3節「中国の動乱と変容」と続き、第4節「東アジア文化圏の形成」の後半部「突厥とウイグル」「ソグド人」という小見出しによって、東アジア世界を中央ユーラシアが挟み込むようなかたちの叙述となっている。

これは現行版から項目の順が前後したことにとどまるものではない。上記指導要領の改訂をふまえて、中央ユーラシア東部と東アジアの歴史を一体としてとらえる視点を重視し、両地域それぞれの歴史展開に加えて、「双方の関係が深まりやがて一体化されていくプロセス」を大きな枠組みとして本章は叙述されている。高校の現場では（筆者を含めて）戸惑いもあると思われるが、わかりやすくいえば「東アジア史」＝「中国の王朝交替史」という歴史観からの転換がもてられているということである。

授業を構成・展開するにあたり、この第2章の本文の叙述や歴史地図、図版や資料について、留意すべき事項や変更点を、以下4つの時代にわけて提示していきたい（以下、『詳説世界史 改訂版』（世B310）は「現行版」、『詳説世界史』（世探704）は「探究版」と表記する）。

①並立の時代（前3世紀～後3世紀）

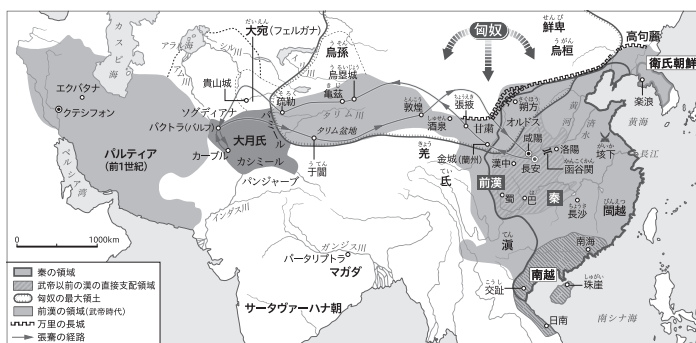
この範囲は「探究版」第1節「中央ユーラシア



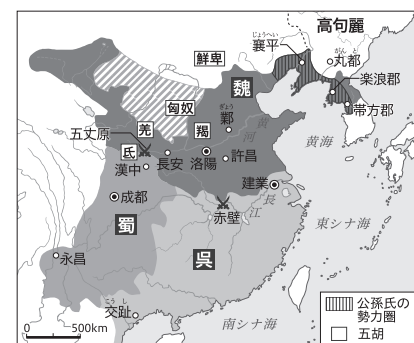
地図1 「現行版」秦・前漢時代のアジア (p.71)



地図3 「現行版」三国時代の中国 (p.82)



地図2 「探究版」秦・前漢時代のアジア (p.42)



地図4 「探究版」三国時代の中国 (p.44)

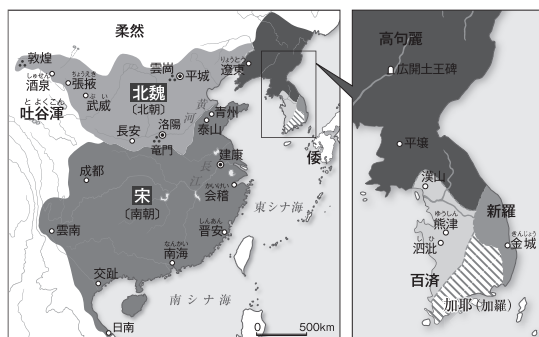
——草原とオアシスの世界」・第2節「秦・漢帝国」にあたる。この期間は、モンゴル高原に匈奴、中国に秦・漢という広域政権が並立し、中央ユーラシア東部と東アジアがそれぞれ別個に大きくまとめられた時代としてとらえられている。地図「秦・前漢時代のアジア」を比較すると、「現行版」(p.71) (地図1) に対して「探究版」(p.42) (地図2) では「匈奴の最大領土」を示す境界線・「武帝以前の漢の直接支配領域」が明示されている。また、叙述においても「探究版」では「対外的には、冒頓単于のもとで強大化した匈奴に敗れ、こののち漢は匈奴に屈服して和平をはかった」(p.41)ことを記している。その後武帝が匈奴に遠征したり、匈奴自体が分裂したりするなどの変化はあったが、両地域の勢力は4世紀初めまで「一定の距離を保ちつつ並立する形勢」が続き、まだ「一つの世界として明確に意識されるには至らなかった」。

②二重の南北朝時代(4～6世紀)

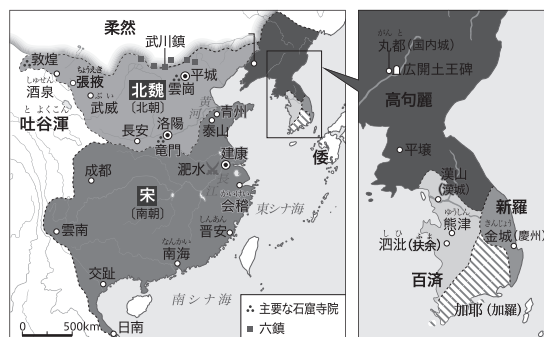
この範囲は第3節「中国の動乱と変容」にあたる。

3世紀前半の後漢滅亡に前後して、激化した反乱や抗争のなかで軍事力に長けた近隣の遊牧民族を傭兵として引き入れたことから、中央ユーラシア東部から華北への移住が増加した。4世紀初め、晋における八王の乱を契機として、移住を進めていた五胡と呼ばれた遊牧諸民族が蜂起して洛陽・長安は侵攻を受け、華北の漢人政権である晋は長江流域に移った。地図「三国時代の中国」を比較すると、「現行版」(p.82) (地図3) に対して「探究版」(p.44) (地図4) では「五胡」の位置が大きく移動して華北に入っており、また公孫氏政権の勢力圏が遼東から朝鮮半島に広がっていたことが示されている。

これ以降、華北では鮮卑族の拓跋氏が建てた北魏を中心に諸民族の融合が進む一方、「モンゴル高原では5世紀に柔然が台頭し、北魏の君主は遊牧世界と新たに支配した農耕世界の双方を意識」した政策をとらざるをえなくなった。このように「モンゴル高原と華北、華北と長江流域の動向が



地図5 「現行版」5世紀の東アジア (p.83)



地図6 「探究版」5世紀の東アジア (p.44)

北齊のある名家の人が、こんな話をしてくれたことがある。「うちには17歳になる一人息子がおります。ものを書くのがうまく、鮮卑語と琵琶をしこんだところ、だんだん上達してきております。これを手がかりとして高位のお方にお仕えすれば、きっとご寵愛を受けましょう。これもまた大事なことです」。私はうつむいて答えなかった。いやはや、これは教育とはいえない。そんな技芸によって出世できるのだとしても、お前たちにはしないでほしいものだ。(著者訳)

資料1 「探究版」『顔氏家訓』(p.45)

権利の都合上、紙の冊子のみでの掲載とさせていただきます。

図版1 「探究版」北魏初期の祭天遺跡(p.45、カラーは巻末図版参照)

相互に密接に関係しながら展開する時代となった。とくに5世紀からは、柔然・北魏からなる「北の南北朝」と北魏・南朝という「南の南北朝」とが複合した「二重の南北朝」とも呼べるような形勢となり、3地域が相互に大きな影響をおよぼしあった。

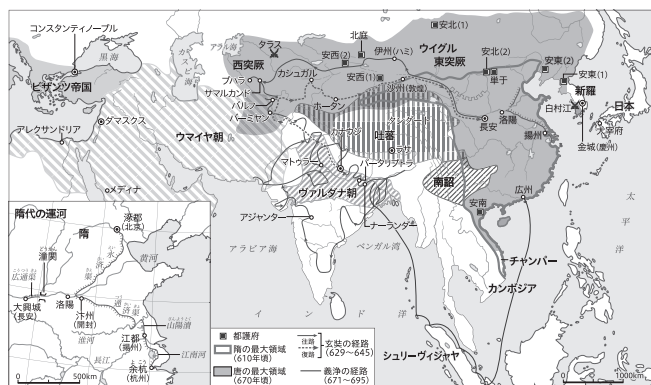
地図「5世紀の東アジア」を比較すると、「現行版」(p.83) (地図5) に対して「探究版」(p.44) (地図6) では「北魏と柔然の境界線」が加えられ、柔然に対応して北辺におかれた北魏の鎮(駐屯地)が明示されている。上記「二重の南北朝」の視点をおさえておくことにより、新たに叙述に加えられた「六鎮の乱」(p.45)の歴史的な意味も正しく理解できるだろう。

また「探究版」の資料『顔氏家訓』(p.45) (資料1) からは遊牧系の人々が統治する北朝に対する漢人の複雑な感情を学習者に読み取らせることができるだろう。そして中国式の祭壇で遊牧的な方法で

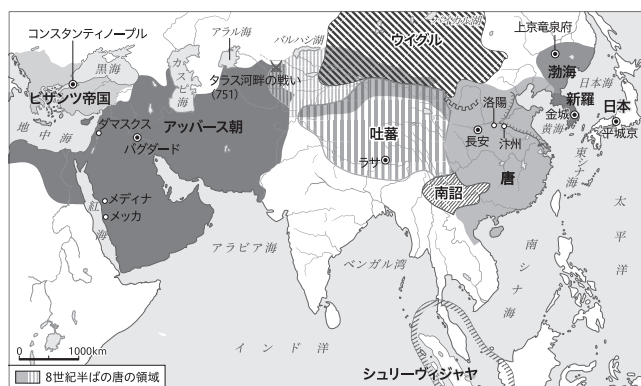
天をまつる儀式をおこなっていた跡である「北魏初期の祭天遺跡」(p.45) (図版1) からは、双方の文化の融合が理解できよう。このような新たな資料・図版は「二重の南北朝」という視点を理解させる助けとして利用したい。加えて冊封体制に関しても、「探究版」は中国王朝が「南朝と北朝、あるいは北朝と遊牧諸民族のあいだの対抗関係のなかで優位に立つため、積極的に近隣の勢力に官位や称号を与えて、自国の影響下に取り込んだ」(p.47) 結果として成立した理念上の秩序であると定義づけている。

③一体化の時代(7世紀～8世紀中頃)

この範囲は第4節「東アジア文化圏の形成」にあたる。7世紀初め、唐の李世民(太宗)が東突厥を屈服させたことにより、「二重の南北朝」時代は終結した。「探究版」の叙述では「第2代皇帝となった李世民(太宗)は、国内の諸制度を整えるとともに、東突厥を破った。遊牧諸民族は、太宗を天か



地図7 「探究版」7世紀のアジアと大運河(p.48)



地図8 「探究版」8世紀後半のアジア(p.50)

ら権力を授かった可汗とみなすことで、その支配を受け入れた」(p.48)とある。そして「つぎの高宗は、西突厥を服属させて西域のオアシス諸都市に進出」(p.48)し、「二重の南北朝」は再統一されたのである。

これに先立つ中央ユーラシア東部の歴史展開は、本節後半の小見出し「突厥とウイグル」で叙述されている。「6世紀半ばにモンゴル高原の柔然を倒したトルコ系の突厥は、可汗の統率のもとで中央ユーラシアに領土を拡大」(p.52)し、また「彼ら固有の信仰は、天神(テングリ)信仰を中心とするシャマニズム」(p.52)であったとされる。つまり李世民(太宗)が「遊牧諸民族から「天可汗(てんかかん／テングリカガン)」に推戴された」結果、中国の君主号である皇帝と遊牧の君主号の双方を、唐(＝拓跋(トルコ系民族の呼称ではタブガチュ))の君主が兼ねたのである。

地図「7世紀のアジアと大運河」(「探究版」p.48)(地図7)からは、「現行版」(p.87)と同様に、唐の最大領域が隋と比較して中央ユーラシアの広範な地域におよんでいることが確認できる。また、資料「『旧唐書』輿服志」(p.49)や図版「唐代の軽食」(p.51)は、中央ユーラシアや西アジアの衣食文化が広く中国に浸透していたことを理解する助けとなるだろう。

④「征服王朝」萌芽の時代(8世紀後半以降)

この「一体化の時代」は安史の乱を受けて8世紀後半に崩れる。「8世紀後半のアジア」(「探究版」p.50)(地図8)は、新しい視点のまとめともいえるような歴史地図である。

従来唐王朝といえば地図7のイメージが一般的で、中華帝国による近隣地域の支配を想起させるものであった。中国王朝の伝統的な観念のなかでは安祿山ら

は「天下を乱した反逆者」であり、「現行版」では、「8年続いたこの乱はウイグルの援軍を得てようやく鎮圧されたが、その後中央政府の統制力は弱まり、有力な節度使が地方の行政・財政の権力をにぎって自立の勢いを示した(藩鎮)。また、ウイグルや吐蕃の侵入もしばしばおこり、唐の領土は縮小した」(p.93)と記されている。これに対して「探究版」では節度使の自立や中央政府の力のおよぶ範囲の縮小には同様に触れているが、「これをきっかけに唐の国家や社会は性格をかえることにな」(p.51)り、両税法や塩の専売といった新税制によって「唐はこののちも国力を保った」(p.52)と記されている。唐王朝は安史の乱以後約140年間維持された。その新しい姿が「8世紀後半のアジア」(地図8)にある唐王朝であり、東方ユーラシアにウイグル・吐蕃・唐が鼎立している形勢が読み取れるであろう。

安祿山はソグド人の父と突厥人の母からうまれたとされ、彼の経済的・軍事的な基盤はソグド人の「中央ユーラシア一帯におよぶ通商ネットワーク」（「探究版」p.53）であった。この反乱を中央ユーラシア世界の動向のなかで、「征服王朝」の先行形態と考える研究者もいる。森部豊『世界史リブレット人18 安祿山』（山川出版社、2013年、p.91～92）では、「騎馬遊牧民の勢力は、その強力な騎馬軍事力を支柱とし、「大人口の農耕民・都市民を擁する地域を、少ない人口で安定的に支配する組織的なノウハウを完成」し、文字文化も取得して支配システムを構築し、「中央ユーラシア型国家（征服王朝）」を出現させていく。このような国家に類するものが、契丹＝遼、沙陀系諸王朝、西夏王国、甘州ウイグル王国、西ウイグル王国、カラ＝ハン朝、ガズナ朝、セルジューク朝、ハザール帝国などであり、これに先行するものが「安史の乱」であって、失敗に終わったのは「8世紀の段階では、「征服王朝」の出現は時期尚早であった」ためと指摘している。

遊牧世界と農耕世界を一体化させた国家像・世界観は、モンゴル帝国を経て最終的には皇帝とハーンを兼ねた清朝へと受け継がれるが、授業展開の根底には、中央ユーラシア東部と東アジア世界における独自性と一体性を関連づけて理解する視点が求められていると考える。

おわりに

本稿では教科書『詳説世界史』第2章「中央ユーラシアと東アジア世界」の叙述や構成における著作者の新しい視点を提示したが、この地域に関してはほかにも『詳説世界史 改訂版』からの変更点数が数多くある。とくに第1章第4節で取り上げられ、前漢の統治に大きな影響を与えた「黄老の政治思想」、漢代における儒教や王莽の扱いと評価などに関しては、新しい研究動向が盛り込まれた叙述、構成となっている。このような点にも留意

して世界史探究の授業展開を考えていただければと思う。（いしい・えいじ／東京都立国立高等学校教諭）